この物語は R-18 指定です。
そもそも18歳未満は神社モドキ自体を閲覧することをお勧めしません。
第1話はまだマシですが、話が進んで行くにつれ、有害な記述が増えてきます。
JUNKMAN のポリシーとして特に具体的な警告はいたしませんが、読み進められる場合は自らの責任でそれなりの覚悟をしてお進みください。
なお、無断転載・翻訳の類いはお断り申し上げます。

ノモイの頸木・第1話
by JUNKMAN

＊＊＊＊＊

ブーッ、ブーッ、ブーッ
侵略警報、侵略警報、警報システムに、未確認の異星からの来襲が感知されました。
市民の皆さんは、ただちに安全なシェルターに避難して下さい。
繰り返します。
侵略警報、侵略警報
・・・
・・・
地球連邦旧ジャパン州ネオ・ナゴヤ市の市民たちは、突然鳴り響いた警報にせき立てられて、慌てて屋外に飛び出した。

「あれは何だ？」

誰かが指さした先の上空に、虹色の雲塊が出現する。
市民たちがこれを見上げていると、その雲塊からいきなり巨大な人影が飛び出してきた。
見たところ身長は優に3000メートルオーバー。
若い女性だ。
明らかに異星人であるが、ヒューマノイドタイプであり、サイズの違いを考慮しなければアジア系の地球人そのものといえる。
しかも美少女だ。
漆黒のセミロングヘア、小顔で、両眼はぱっちり、唇は少し厚ぼったく、頬にもやや丸みがある。
基本細身で脚が異常に長く、アイドルと言うよりはモデル体型に近いが、しかし出るべき所はそこそこ出ている。
地球人に換算したら 18 歳くらいというところだろうか。
そもそも服装が地球の、しかも旧ジャパン州のハイスクールの制服にそっくりだ。

ルックスが良いので街で評判になる女子高生、という感じである。
それにしても巨大だ。
ここまで巨大な体躯を持つ異星人は初めて見た。
地上に降り立った超巨大な美少女型異星人は、無表情でネオ・ナゴヤの繁華街を悠々と跨ぎ越して仁王立ちした。
この間、終始無言、無表情である。

＊＊＊＊＊

巨大異星人出現の報を受けて、ネオ・ナゴヤ市警はただちに機動部隊のヘリコプターを現地に派遣した。
しかし、任務に当てられた警察官たちはまるで士気が上がらない。

「・・・こ、こんなの、俺たちにどうしろ、っていうんだよ？」

何しろ異星人は巨大すぎるのだ。
報告では身長 3440m、体重推定 400Mt
Mt＝メガトンである。
重さの単位であるが、核兵器の破壊力の指標としてしか見たことがない。
個体としてあり得ない質量である。

「で、でかい・・・でかすぎる」

いま、こうして至近距離に飛来しても、まるで生物を相手にしている感じがしない。
まるで一つの風景のように見える。

「でかすぎる・・・」

彼女が風景のように見えるのも無理はない
身長 3440m といえば、このネオ・ジャパン州のほとんどの山よりも高い
それどころか、いま、この目の前に真横から突き出されている胸の膨らみ自体が、まさに山そのものである
ヘリコプターを操縦する警察官たちは頭がおかしくなりそうだった

これは何だ？
本当に生物なのか？
こんな巨大な生物がありうるのか？
だが、目の前の女子高生の姿をした巨大物体は、明らかに生物だった。
しかも、確かに女子高生くらいの若い女性だ。
匂いである。
匂いでわかる。
甘くて、ちょっと爽やかに酸味がかって、度数の低いリキュールのような香り。

これは確かに女子高生だ。
警察官たちはいよいよ頭がおかしくなってきた。

「でかすぎる・・・」

警察官たちは、うなされたかのように同じ言葉を繰り返した。
こんなにでかい女子高生がいるわけない。
それとも俺たちが小さいのか？
この超巨大女子高生に比べたら、ネオ・ナゴヤ市警のヘリコプターなんて小バエみたいなものだ。
その小バエの中にいる俺たちは何だ？
微生物か？

「・・・ダメだ、手に負えない。」

ネオ・ナゴヤ市警は早々に諦めて、地球防衛軍に SOS を送った。

＊＊＊＊＊

地球連邦政府事務総長執務室。
いつものように机に突っ伏して呑気に昼寝を楽しんでいた事務総長は、ノックもなくいきなり駆け込んできた地球防衛軍長官にたたき起こされた。

「事務総長！」

「むにゃむにゃ・・・ん？君か？部屋に入るときはノックくらいしたまえ。」

「それどころではありません。旧ジャパン州ネオ・ナゴヤ市に事前通知なく巨大な異星人が現れました！」

「なに？また侵略かね？・・・ふう、困ったものじゃな。」

地球人が地球外生命体とファーストコンタクトを果たしてから 200 年。
地球外の進んだ科学技術を学ぶことで地球の文明水準も飛躍的に進歩した。
だが、良いことばかりでもない。
地球という未開な星の存在が知られてしまえば、より文明水準の進んだ星からの格好な侵略対象とされてしまう。
実際に、このところの地球は毎年のように異星人の侵略を受けていた。
もちろん、侵略を受ける地球も手をこまねいて見ているわけにはいかない。
国境の壁は取り払われ、ついに地球は一つの連邦政府の下で統治されることになった。
そのトップに立つ人物が地球連邦事務総長であり、そしてその右腕として地球防衛の全てを任せられたのが地球防衛軍長官である。
この防衛軍長官があり得ないほど優秀だった。
進んだ科学技術に基づく高性能な兵器を前面に押し出して次々と攻めてくる異星からの侵略軍に対し、防衛軍長官は諸葛孔明も真っ青の卓越した戦術で渡り合い、撃退して、堂々と地球を守り抜いてきたのである。

「わが地球連邦はいかなる侵略者にも屈しないよ。すぐに地球防衛軍の出動じゃ！」

「お待ち下さい、事務総長。」

「何じゃね？」

「異星人は事前通知なく現れただけです。その目的が侵略であるかどうかはまだ確認できていません。」

「何を悠長なこと言ってるんじゃ。」

事務総長は眉をしかめた。

「事前通知なく現れたんじゃろ？しかも巨大異星人じゃろ？そんなもの、侵略目的に決まっとるじゃないか。」

「しかし事務総長・・・」

「しかしもへったくれもないわい。侵略対応で初動の遅れは致命傷になる。ただちに地球防衛軍出動じゃ！」

「・・・りょ、了解しました。」

＊＊＊＊＊

「・・・こちら地球防衛軍第 7 方面航空防衛隊、こちら地球防衛軍第 7 方面航空防衛隊、第 9 方面隊、応答願います、どうぞ。」

「・・・こちら地球防衛軍第 9 方面航空防衛隊、現在旧ジャパン州ネオ・ハママツ上空から西北西に向かっています、どうぞ。」

「・・・こちらは現在旧ジャパン州ネオ・ギフ上空です、既にターゲットが視認できます、どうぞ。」

「・・・こちらも確かにターゲットを視認し、射程内に入りました、どうぞ。」

「・・・こちらもターゲットへの射程内には入りましたが、未だにネオ・ナゴヤ市民の避難が完了したという情報は得ておりません、どうぞ。」

「・・・地球防衛軍本部から、直ちにターゲットへの攻撃を開始すべしという命令を受けました、どうぞ。」

「・・・了解しました、それでは本隊は一斉攻撃のフォーメーションに入ります、どうぞ。」

「・・・了解しました、本隊も一斉攻撃のフォーメーションに入りました、どうぞ。」

「・・・攻撃のカウントダウンに入ります、どうぞ。」

「・・・了解しました、こちらも同調します、どうぞ。」

「・・・5・4・3・2・1・・・オープン・ファイヤー！！！」

＊＊＊＊＊

ひゅーだだだだだだだだだだだだ

上空に現れた無数の戦闘機が、超巨大美少女型異星人に向かって一斉にミサイル攻撃を開始した。
ひゅーだだだだだだだだだだだだ
ターゲットは巨大である。
この距離から発射して外してしまうようなサイズではない。
もうもうと立ちこめる爆煙に包まれたターゲットは、もはや蜂の巣状態間違いなしだ。

ひゅーだだだだだだだだだだだだ

「・・・撃ったね。」

薄れゆく爆煙の向こうで、超巨大美少女型異星人が呟いた。
いや、呟いたというより、まるでセリフを棒読みしたようである。

「ボクが何もしていないのに、キミたち、いきなり撃ってきたね。」

驚いたことに、爆煙が消えた後には、あの超巨大女子高生型異星人が何事もなかったように立っていた。
無傷である。

地球防衛軍の攻撃は、彼女を倒すどころか、傷一つ負わせることもできず、衣服に焦げ痕を残すことすらできなかった。
ただし、攻撃前とは違う点もある。
それまでの無表情とはうって変わって、してやったり、といわんばかりに、満面の笑みを浮かべている。

「いきなりこんな攻撃をされたら、ボク、死んじゃうかもしれないよ。」

超巨大美少女型異星人は「可笑しくてたまらない」という表情で、しらじらとセリフを棒読みする。

「じゃあ、殺されないように、自分で自分の身を守らなくちゃね。」

いうなり超巨大女子高生型異星人は、上空で片腕を、ぶん、と振り回した。
片腕といっても全長 1000 メートルを超える巨大

物体である。
そんなものが超高速で振り回されたら周囲の気流は壊滅的に乱される。

「う、うわあああああああああ！！！」

たまたま周囲にいた戦闘機 43 機が、この竜巻のように乱れた気流に飲み込まれてコントロールを失い、墜落したり、お互いに衝突して爆発炎上したりした。
ただの一振りで、である。

「・・・まだたくさん残ってるね。」

超巨大美少女型異星人は、両腕をぶんぶん振り回し続ける。
そのたびに数十機の戦闘機が失われていった。
もはや攻撃どころではない。
やむなく戦闘機部隊が超巨大女子高生型異星人から距離を置き始めたころ、地上部隊がネオ・ナゴヤ市に到着した。
めざとい超巨大美少女型異星人が、これを見逃すはずはない。

「うわ、今度は戦車か。たいへんだ、身を守らなくちゃ・・・」

超巨大女子高生型異星人は、片足を挙げて長径 500 メートルはあろうかという超巨大ローファーを戦車隊の上空に高々と掲げると、逃げる間も与えず一気に踏み下ろした。

ずっしいいいいいいいいいいいいん！！！

この一踏みでいったい何両の戦車がスクラップにされたことだろう。
それはわからないが、確かなことは、戦車なんかこの超ウルトラ大巨人娘の前では全く無力であるという事実だった。

「た、退却！退却！」

何のために出てきたのかわからない地球防衛軍地上部隊は、蜘蛛の子を散らすようにネオ・ナゴヤ市繁華街へ逃げ込んでいった。
固まって行動していたらまとめて踏み潰されるのだから、バラバラにばらけて逃げるこの行動は合理的である。
だが、それこそが超巨大美少女型異星人の思うツボだった。

「あれあれ、散り散りばらばらになっちゃったよ。もうこの街のどこにボクを攻撃してくる人たちが隠れているかわからないね。仕方ない、身を守るためには、もうこの街ごと破壊するしか方法がないね。」

超巨大美少女型異星人はネオ・ナゴヤの市街を上空から覗き込んだ。
必死になって逃げ惑う市民たちの絶叫が心地よい。
面白そうだからちょっと摘まみ上げてみようかとも思ったが、小さすぎて難しそうだ。
と、思ったら、おあつらえ向きのものを見つけた。
ビルの高層階からロープで下に向かって脱出を試みている人たちがいる。
おそらく揺れのために停電になってエレベーターが止まり、上層階に取り残されたのだろう。
超巨大女子高生型異星人は、ロープをひょいと摘まみ上げて、脱出中の人々を目の前にぶら下げた。

「うわあああああああ！！！」

摘まみ上げられた。
よりによって超巨大美少女型異星人に見つかって、摘まみ上げられてしまった。
脱出中の人々は、ロープにしがみつきながら天を仰いだ。
もう逃げ道はない。
絶望する彼らを、超巨大女子高生異星人のありえないほど巨大な瞳が遠慮なくじろじろと眺め回す。
彼らは生きた心地がしなかった。

「助けてくれ！」

「お願いだ！逃がしてくれ！」

「・・・そんなこと言っといて、キミたちもボクを殺そうとするんでしょ？」

「いやいや、違う！絶対違う！だから助けて！」

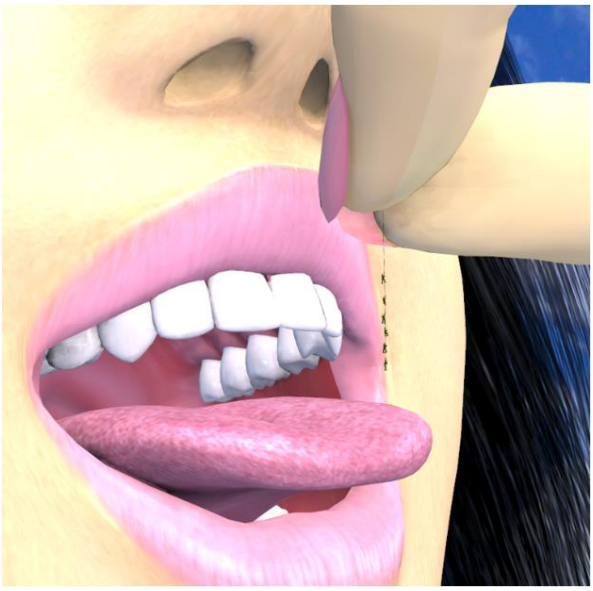
「信用できないね。キミたちなんかこうしてやるよ。」

超巨大美少女型異星人は口をあんぐりと開けると、脱出中の人々をロープごと超巨大な口腔の前にぶら下げた。

「・・・あーん」

「ぐわあああああああああ！！！」

断末魔の叫びと共に、彼らの姿は閉じられた口腔内に消えていった。
避難先のシェルターの中で固唾をのんで地上の実況中継を見守っていいたネオ・ナゴヤ市民たちも、絶望のうめき声を上げた。



＊＊＊＊＊

「・・・こちら地球防衛軍第 7 方面航空防衛隊、こちら地球防衛軍第 7 方面航空防衛隊、第 9 方面隊、応答願います、どうぞ。」

「・・・こちら地球防衛軍第 9 方面航空防衛隊、こちらは既に戦闘機を 176 機失いました。攻撃はターゲットに対して全く無効でありました、どうぞ。」

「・・・こちらの攻撃もターゲットに全て着弾しておりますが、ダメージは与えられていない模様です。既に戦闘機を 212 機失い、戦力は著しく低下しております、どうぞ。」

「・・・上空から視認する限り、地上部隊もほぼ全滅と思われます、どうぞ。」

「・・・ターゲットがネオ・ナゴヤの市街を無差別に破壊している状況を確認しました。市民にも、相当数の犠牲者が出現している模様です、どうぞ。」

「・・・このままではターゲットの侵略行為を阻止することは困難と思われます。戦略核兵器の使用止むなしと判断します、どうぞ。」

「・・・同意します、地球防衛軍本部からは、最悪の場合は戦略核兵器の使用もオプションに入れろと命令を受けました、どうぞ。」

「・・・了解しました、それでは戦略核兵器をターゲットに対して使用します、どうぞ。」

「・・・了解しました、こちらも同調して戦略核兵器をターゲットに対して使用します、どうぞ。」

「・・・5・4・3・2・1・・・ファイヤー！！！」

＊＊＊＊＊

「・・・というわけで、ネオ・ナゴヤでは既に 100 万人単位の市民が犠牲になっており、現地に向かった地球防衛軍第 7／第 9 方面隊も全滅しました。」

「・・・ぜ、全滅、じゃと？」

事務総長はうめくように呟くと天を仰いだ。
防衛軍長官はここに至っても眉毛一つ動かさず、冷静に状況説明を続ける。

「一方で、異星人は無傷です。」

「無傷？・・・核兵器も無効じゃったということかね？」

「全く効果がありませんでした。」

「い、いや、たとえ彼女自身に核兵器は無効でも、実は黒幕だった宇宙ステーションに核ミサイルを撃ち込めばなんとかなる、ってことはないかね？」

「そんな不自然なプロットは漫画でもボツのレベルです、事務総長。」

実際はボツにならなかったわけだが、そんなことは知らぬ事務総長は執務机に突っ伏して頭を抱え込んだ。
防衛軍長官は、なお眉毛一つ動かさないまま言葉を続けた。

「・・・彼女の言動には、解せない点があります。」

「？」

「我が地球防衛軍を殲滅しているにもかかわらず、未だに『この星を侵略する』という宣言がありません。」

「それは彼女のスタイルじゃろ？」

事務総長は気の抜けた顔で首を横に振った。

「だからどうしたというんじゃね？」

「はい、事務総長、歴代の侵略者たちは、最初に『この星を侵略する』と宣言してから侵略行動を開始してきました。彼女だけが違う。ここには何か秘められた意味があるような・・・」

「でも宣言しないだけで、思いっきり破壊行動をしとるじゃないかね。変わらんよ、何も。」

「そうでしょうか・・・」

「いずれにせよ、地球防衛軍にはもう彼女を止める力はない。地球はもう終わりじゃな・・・」

「事務総長、諦めたらそこで試合終了ですよ。」

防衛軍長官はチラリと後ろを振り返る。
これに応じて、眼鏡をかけた細身のアジア系青年が事務総長執務室に入室してきた。

＊＊＊＊＊

ノモイの頸木・つづく

次回予告
暴かれる侵略者の恐ろしい計略。追い詰められた連邦政府は一丸となって地球を守り抜くことができるのか？謎が謎を呼び権謀術数渦巻くノモイの頸木・第２話、請うご期待！